

日本機械学会 国際チャプター
インドネシア・セクション開所式について

国際チャプター運営委員会委員
東京理科大学
中曽根 祐司

2008年7月23日(水)～24日(木)、インドネシア国バンドン工科大学(ITB)の屋根の高い49年前のITB設立当時から由緒ある建物であるウェストホールとその周辺の教室を使って、日本機械学会国際チャプター・インドネシア・セクション(JSME International Chapter Indonesia Section; 略称 ICIS「アイシス」)開所式および AUN/SEED-Net 地域ワークショップの合同会議が開催された。今年、インドネシアと日本の国交樹立50周年にあたり、本会議も両国国交樹立50周年記念事業実行委員会より「インドネシア日本友好年事業」として正式に認定された。

バンドン工科大学は、ジャカルタから東に車で3時間半ほどのバンドンという町にある、全国で数%という上位の秀才が集う国立の工科大である。正門から入ると、「ガネーシャ」と呼ばれる象の頭を持つ「学問の神」(なぜか「商業」の神も兼務)が2体並んで出迎えてくれる。

この会議には、日本機械学会会長 白鳥正樹教授(横浜国立大学)を始め、国際チャプター運営委員会委員長 菱田公一教授(慶應義塾大学)、(独)国際協力機構(JICA) 白川浩博士、ITB 学術担当筆頭副学長 アダン教授(Adang Surahman)、インドネシア工学会機械工学部部門長 ブディ博士(Budhi Mulyawan Suyitna)および前部門長サトリオ博士(Satryo Soemantri)、バンドン工科大学工学部長 アンディ助教授(Andi Isra Mahyuddin)、ICIS セクション長 ヤトナ博士(Yatna Yuwana Martawirya)(バンドン工科大学)ら、日本、インドネシアおよびアセアン諸国7か国から2日間で延べ255名の機械工学関係の研究者、技術者および学生が参加した。参加者の国別および所属別内訳を表1に示す。

ICISの設立は、国際チャプター運営委員会によるもので、この委員会は2004年、当時の会長である長島昭名誉教授(慶應義塾大学、横浜国立大学理事)の提唱によって、菱田公一教授(慶應義塾大学)を委員長に開始された。その主な目的は、

- 1) 日本機械学会の国際社会におけるプレゼンスの確保
- 2) 各国へのセクション設置による個人会員の活動支援
- 3) ITの活用による国際交流の実現

であり、海外に赴任し、現地で日本の機械工学の発展・普及に努める学会員へ継続的な学会サービスを提供し、各人

項目名		7/23(水)	7/24(木)
国 別	インドネシア	64	95
	日本	13	15
	ベトナム	11	11
	シンガポール	6	6
	タイ	5	5
	ラオス	4	4
	ミャンマー	3	3
	フィリピン	2	2
	マレーシア	2	2
	合 計	112	143
所属別	大学	92	95
	中立機関	9	15
	企業	11	18
	合 計	112	143

表1 JSME ICIS 開所式および AUN/SEED-Net 地域ワークショップ合同会議の参加者数

の活動を支援するとともに、当該国の機械技術者および研究者の育成に貢献しようというものである。

設立当初より、中国、韓国、インドネシア、シンガポール、タイ、マレーシア、ブラジル等、日本機械学会と既に協力関係にある各国(一部は協力協定未締結)の学協会からセクション候補を選出し、現地調査や各国該当機関のキーパーソンとの折衝を重ねながら、まずは、現地学協会関係者からセクション設立の要望の高いインドネシアおよびタイにセクションを設置する方向で準備が進められた。

実は、ICISは、2007年4月、既にヤトナ・セクション長とワルダナ博士(Nyoman Gede Wardana)(プラビジャヤ大学)を日本に招待し、日本機械学会総会懇親会でお披露目をしており、約12名のセクション会員も登録されていた。しかし、ヤトナ・セクション長ら ICIS の主要メンバーからの強い要望で、現地会員への周知徹底とモチベーション作りのために、現地での開所式を執り行うこととなった次第である。

このため、昨年11月、本間寛臣委員(豊橋技術科学大学)と小阪雅裕事務局員、筆者の3名が、同国ジャクアラ大学(バンダ・アチェ)で開催されたインドネシア機械工学協会総会に参加し、全国から参加した約13大学の機械工学科主任と意見交換を行い、ICISへの要望を聴取した。また、現地邦人企業アジアいすゞ鋳物会社を訪問し、現地企業からの要望も聴取した。さらに、本年6月、本間委員と筆者が再び現地に赴き、ヤトナ・セクション長と ICIS 関係者 3



写真1 JSME ICIS 開所式および AUN/SEED-Net 地域ワークショップ合同会議参加者の集合写真

2008年7月23日(水)	
9:00 ~ 10:10	JSME ICIS 開所式
10:10 ~ 10:40	写真撮影
10:40 ~ 11:10	AUN/SEED-Net の紹介と活動の現況
11:10 ~ 12:10	開所式記念シンポジウム (固体力学)
12:10 ~ 13:10	昼食
13:10 ~ 14:10	インドネシア側と日本側の意見交換会
14:10 ~ 15:10	開所式記念シンポジウム (熱・流体力学)
15:10 ~ 15:20	休憩
15:20 ~ 16:20	開所式記念シンポジウム (機械力学)
18:30 ~ 20:30	バンケット
2008年7月24日(木)	
8:00 ~ 9:30	v-BASE セミナー AUN/SEED-Net 招待講演 および一般講演
9:30 ~ 9:40	休憩
9:40 ~ 11:10	v-BASE セミナー AUN/SEED-Net 招待講演 および一般講演
11:10 ~ 11:30	v-BASE セミナー講演
11:30 ~ 12:30	昼食
13:30 ~ 14:30	v-BASE セミナー AUN/SEED-Net 招待講演 および一般講演
14:30 ~ 14:40	休憩
14:40 ~ 15:40	v-BASE セミナー AUN/SEED-Net での共同研究に関する議論
15:40 ~ 15:55	閉会式

表2 合同会議のプログラム概要

名、計6名で商工会議所の現地出張所(ジャカルタ日本クラブ)を始め、バンドンから車で約2時間、バンドンとジャカルタの間に位置する邦人企業70~180社から成る工業団地3箇所を訪問し、ICISの紹介と開所式の広報活動を行った。

その結果、ICISに対して次のような要望が出された。

- 1) 国内A級の機械工学分野の論文集の発行
- 2) 現地法人企業との人的ネットワークの構築
- 3) 国際会議の開催支援
- 4) 人材教育およびそのための技術情報の提供
- 5) 優秀な学生の確保

そこで、今回の合同会議に当たっては、上の要望のうち、2)~5)を満たすよう企画した。すなわち、2)と5)については修士論文および博士論文のポスター発表、3)についてはシンポジウムとAUN/SEED-Net地域ワークショップ、3)と4)についてはv-BASEセミナーによってそれぞれの要望が満たされると判断して、ITBのタタ博士(Tatapipta Dirgantara)らインドネシア側とメールで何度もやりとりをして、表2に示すようなプログラムを決定したのである。

初日の開所式では、まず、ITB副学長アダン教授から開会の挨拶があり、次に、インドネシア工学会のプディ博士からICISへの期待が述べられた。日本側を代表して、まず、国際チャプター運営委員長菱田教授から、ICISへの期待と協力への呼びかけおよび本間委員のインドネシアと日本の学术交流における長年の貢献とICIS設立への貢献に対する謝辞が述べられた。また、開所式と並行して開催されたAUN/SEED-Net地域ワークショップの主催者代表として白川浩博士(JICA)がAUN/SEED-Netの概要とその意義について講演した。次に、日本機械学会長白鳥教授からの挨拶があり、ICISの今後における期待と日本機械学会の紹介があった。最後に、ICIS設立を祝して、白鳥教授、アダン教授、白川博士の3名による銅鑼の打ち初めがあった。

開所式後、正門を入ってすぐの広場で参加者全員の集合写真を撮った(写真1)。後方に開所式会場となった屋根の高い建物が見える。これは、49年前のITB設立当時の由緒ある建物で、高い屋根にして空気の循環を巧みに操って、年中高温多湿の気候の中でクーラー無しで快適に過ごせるよう工夫されている。昔の人の知恵の偉大さを身を以て知った開所式でもあった。

開所式記念シンポジウムでは、固体力学、熱・流体力学、

機械力学の3分野の招待講演をインドネシアと日本から各分野1名ずつ行った。日本側の招待講演者は、白鳥教授(固体力学)、菱田教授(熱・流体力学)および山浦弘准教授(機械力学;東工大)である。

パネル討論では、インドネシアばかりでなく、アセアン諸国から集まった参加者とともに、ICISの活動について議論した。ICISに対する参加者の期待は予想以上に大きく、まず、(1)今回の開所式は、インドネシアと日本機械学会の今後の末長い交流の第一歩に過ぎないことを確認した。また、(2)ICISを全インドネシアの組織とし、各地に支部を置きたい。ただし、日本機械学会からの経済的な支援を期待するものではない。(3)新しく作る論文集に日本人編集者を出して欲しい。(4)インドネシアにおける会議へ日本機械学会員の参加等、恒常的な学术交流を望む。(5)技術者の認証事業を行って欲しい等の要望が出された。

バンケットは、回教徒の国らしく、アルコール色が一切なく、日本人参加者の多くが物足りなさを感じていたようであった。しかし、ITB学生による伝統的な竹製打楽器を使った音楽演奏が始まると、その透明感のある音色に酔いしれることが出来た。また、指揮者に合わせて聴衆自らが参加して竹楽器による演奏を行うなど、通常のバンケットでは味わえない楽しい一時を過ごした。

翌日は、インドネシア学生によるポスターセッションを挟んで、v-BASEセミナーとAUN/SEED-Net地域ワークショップがパラレル・セッションとして実施された。

インドネシアの修士および博士課程修了予定者によるポスターセッションでは、20件以上の発表があり、会議に参加していた研究者や技術者と学生との学术交流が活発に行われた。このポスター会場には、インドネシアの企業のブースが2台併設され、自社製品の展示を行った。当初、日本の企業に自社のPRのためのブースを設置してもらって、学生の発表を聞くとともに、優秀な学生を獲得するためのリクルート活動をしてもらうことを期待したが、今回は日本企業からの参加がなく、すべてインドネシアの企業であったため、本来の目的が十分達成されたとは言えず、次回以降に望みをつなぐ結果となった。

v-BASEセミナーは、生産現場における振動問題事例とその解決法に関する講習会であり、これまでに、国内のみならず、インドネシア、タイ、マレーシア、中国、韓国、オーストラリア、インド等で開催し、好評を得てきたものである。今回、金光陽一氏(元九州大学)と矢部一明氏(東洋エンジニアリング(株))が講師となり、現地企業技術者の教育に役立つ実践的な事例について講義を行った。

AUN/SEED-Netは、「アセアン工学系高等教育開発ネットワーク」の略称で、アセアン10ヶ国における工学系人材の育成と日本・アセアン各国のアカデミック・ネットワークを確立することを目的としたJICAのプロジェクトである。今回、白川博士と本間教授のご尽力で、このプロジェクトの第1回地域会議/ワークショップをICISの開所式と同時開催していただくこととなった。この会議では、各セッションの冒頭で鈴木真二教授(東京大学)、本間教授、筆者の3名による招待講演を行い、その後、4室に分かれてプロジェクトの参加大学間で実施している共同研究の進捗状況および成果について発表し、活発な意見交換を行った。

以上のように、ICISおよび日本機械学会の関係各位の多大なるご尽力により、今回のICISの開所式およびAUN/SEED-Net地域ワークショップ合同会議は、成功裏に終了した。しかし、インドネシアからの参加者の多くが念を押すように指摘していたように、これはICISの活動の始めの一歩に過ぎない。今後とも、国際チャプター運営委員会が継続的にICISを支援していくことが是非とも必要である。他方、運営委員会の支援無しに、真のチャプターと

して自律的に活動していけるよう ICIS を自立させることがより重要で、これが今後の一番大きな課題になると思う。

さて、それにはどうするかと思いついていた時、今回の会議に参加された諸先生方から、今後も ICIS を始め将来設立が予定されている海外セクションの活動にご協力いただけるとの大変心強い御言葉を頂戴した。

日本機械学会会員の皆様にも今後の海外セクションの設立と活動に積極的なご支援、ご協力をお願いして、本報告の結びとさせていただきます。